

第 1595 回 (1 月 25 日)

農家の家族変動への接近

石 原 豊 美

報告は 2 部に分け、前半で日本の農家家族に関する研究動向を概観し、後半で報告者が三地域で実施した農家実態調査の結果を総括した。

日本の農家家族についての研究動向を概観すると、戦後は農家家族が家族研究の主要な研究対象の枠外に置かれてしまいがちであったにも関わらず、1. 系譜と超世代的な連続性の重視 2. 成員生活共同体、家業経営体としての性格 3. 家父長制の日本の特質 4. 居住規則としての直系制などについて共通して論じられていることが分かる。そしてこうした特徴をもつものとしての日本の農家家族がどのような変化を辿って今日に至っているのか、そうした農家の家族変動にどのように接近するべきかに関して、若干ではあるが議論がなされている。従来の制度論的アプローチに少なくとも行動論的なアプローチを加える必要があるとする立場を踏襲して、報告者は個々の成員の経歴に着目して農家家族の変動に接近してみたいと考えた。

多くの研究が、1. 農外就業が世代や性の相違を超えて浸透している 2. 三世同居が支配的な中で家族関係についてはネガティブな面も多い 3. 農業を継承することの意味や他出あつぎと老親扶養の問題などが問われているなど、農家家族の変化の動向を示しているが、報告者が三地域（宮城県米山町、滋賀県愛東町、及び愛知県十四山村）での実態調査によって捉えようとしたのは、成員の（特に就業上の）経歴変化が家族のあり様とどのように関わっているかについてであった。

米山町は 1.0～3.0 ha 層の稲＋畜産を営む農家が多く、Ⅰ兼農家率が高い。男女成員の就業経歴は農家の農家としての再生産に

関わる直接的な要因にしばしば規定されていた。男性がどのような就業経歴を形成するかが農業経営の規模によって規定されたり、他出あつぎの呼び戻しが行われるなどが例として挙げられる。この町では農家の再生産に関わる規範が殆ど自明視されており、成員は基本的にこれに従順であった。

愛東町の農家は主に 1.0～2.0 ha 層及び 0.5 ha 未満の貸付農家群から成り、Ⅱ兼農家率が非常に高い。特に男性の多くは農外就業に傾斜した就業経歴を形成していた。ここでは農外就業機会の確保と（自）家（農業）との関わりのバランスシートが問題になっていた。男性で昇進を犠牲にして農業と両立可能な農外就業先へ転職したり、女性で孫が誕生しても引退せず農外就業を継続するなどの例が特徴的である。この町では農外就業機会の発達に農家成員の経歴形成に大きな影響を及ぼしており、伝統的な世代交替のボタンが崩壊して農家の再生産のあり方が見直される段階にあった。

十四山村の農家は 0.5～1.0 ha 層が多く、農協主導により稲作の機械作業の外部化が進んでいた。名古屋市の通勤圏内にあり、殆どがⅡ兼農家である。地域一帯を襲った伊勢湾台風（昭和 34 年）の影響もあり、農家成員は強い現金収入獲得志向をもって農外就業に傾斜した就業経歴を形成していた。家の継承をめぐる規範自体はここでも強く存在していたが、通勤圏内に豊富な農外就業機会があり、農作業の合理化が進められているために経歴形成上は特に農業との関連が問題になりにくくなっていた。もっとも、年長の世代から農外就業に殆ど専心している年少世代に対して、農業への関心の持ち方や関与の仕方をめぐって不満が露呈されがちではあった。

農外就業機会の出現のような外部からのインパクトによって農家成員の経歴は変化し、農家としての再生産のあり方が問い直されている。